



## The Real Face

取材・文/竹中 聡(本誌) 撮影/林川 淳 撮影協力/喫茶ソワレ

邪魔するな、そこどけ、そこどけ、  
 新京都系、ガリバーゲットが通る。

# Gulliver Get

ガリバーゲット



は女の子が喜ぶ、よく磨かれた上等な酒。女の怨念どころか、痴話ゲンカも見あたらない。ただ1曲目から、ギターはザクザク、ベースはベキベキ鳴っている。これは、ひよっとして…。ストレス溜まってるんじゃないですか？フロントマンのアヤラに聞いた。

「そんな風感じます？ すこい耳してますね(笑)。溜まってます(笑)。確かに、できあがってみた感想としては、もっと粗くしてもよかったですかも。尖る感じは少ないかな。」

みぞおちに溜まった何かをはき出すような、そんなプラスチック音が音の中から感じとれるのである。そしてそれが、良い意味でアルバムにテンションを与えている。

「でも、『まだアカン』はずつつとありますから。今回ののは、ええ曲できたから、『もっとメタルにしたい』とか、『もっとレゲエにしたい』とか。ナンチャットでできる範囲の、イッパイイッパイまで行きたい、みたいな。自分たちの曲を「ナンチャット」とは？「それぞれのジャンルにもっと凄いいりスペクトを込めた、偉大なるナンチャット」だ。

技術があるから、  
 本格派になれる  
 ナンチャットという、  
 圧倒的多様性。

「青いところで、  
 お願いします！」  
 ポキートじゃなくて、  
 いいの？」

「撮影ですか？ 青いとこがいいー」。  
 撮影場所についてのリクエストは「発回答。それは「憧れのポキート」でもなく、「女の怨念がドロツとこもった場所」でもなく、「場末の木屋町」でもない。不思議なリクエストであった。」

青暗い光射す木屋町のバーが思い浮かんだが、見るからにクールで洒落た

店は、ちよつと違う。青い場所、青い場所…。救いの手は、フォトグラフィから伸べられた。「ソワレ」なんか、どうですか？。そうだった。西木屋町四条にある、創業60年余を数える「喫茶ソワレ」。席のレザーまで蒼く見せる、店中の青い光。「夜会」を意味する店名と、昭和の匂いが、このバンドにはピッタリな気がした。

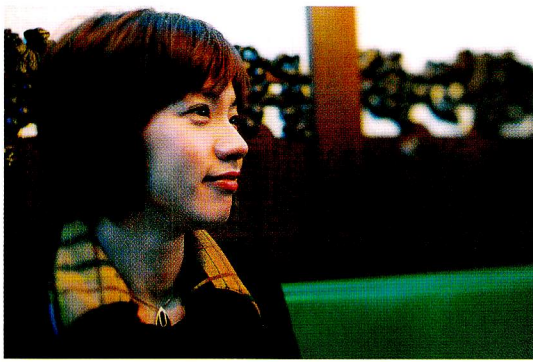
「Gulliver Get」。'07年メジャーデビュー。「紅い月くあの人に愛されますように」というデビューシングルは、なだらかなスイングジャズのようなテンポ

とメロディに、けつこう生々しい歌詞をのつけたナンバーだった。Vo.アヤラ曰く「火曜サスペンス系」、もしくは「女の怨念がドロツとこもった(MCで自ら放った金言)」、そんな曲調(＝バンド調)でもあった。

ホームクラウンが「LIVE SPOT RAG」という事実だけでも、技術の高さを証明しているようなのだが、実際メンバー全員が音楽学院を首席で卒業するよな(あくまでイメージだが)、確たるテクニクを持つ。その彼らが、オール新規レコーディングのアルバムを

手に、本格的に全国に打って出る。  
 粗い男酒は、  
 よく磨かれた女酒に。  
 でもストレスを感じるの、  
 なげだ？

本誌の「Power Play Sound」コーナーに登場してもらってから約2年、久しぶりに届いた新譜は、以前に比べて凹凸がない、聴きやすい(良くも悪くも)ものだった。これまでが漁師が浜で飲むような粗い酒だとするならば、新作



そのナンチャッテは、圧倒的なバリエーション増に貢献していて、ただ、以前に比べると凹凸は少なく思える。「そういうの(凸凹)を取っ払った感じ、分かりやすいものにしてよ」という意識はありますね。マニアックなことは、やりたいと思っただけでもできるから(笑)。

高い技術があるから、音楽に関してマニアックに、もしくはプロフェッショナルになることが、このバンドにとって簡単なことである。

その「分かりやすさ」にもリスクはある。例えば、3曲目の「木屋町で太ももをなでる」という歌詞。「太ももをなでる」のはい。問題は「木屋町」という土地名が入ることだ。全国サイズのミュージシャンに、郷土性は時に危ない。

「それは確かにあるんですけど、それは『スキノ』と読んでもらえたらいいやん、と。京都の一サラーマンをモチーフにしているの、ここは盛り場じゃダメなんですよ」。曲中の冴えない主人公はメンバーの某らしく、「みんなでゲラゲラ笑いながら録りました」とも。小さなリスクより、「おかしみ」

のある曲をつくることの方が大切だった。

「まあ二年目とか、二作目とかは苦しいってじゃないですか。ドブブリそれにはまったというか(笑)」と、また笑う。一言喋ることに、必ずしも良いほど「笑」が入る。そう、このバンドには明らかさがある。常にそれは変わらない。これは大切なことである。

### やりたいこと、8割完成アルバム。あとの2割は、ライブで磨いていく。

前作はインディーズでできあがっていた曲を、いかにライブに近い感じにするかがテーマだった。対して今回は全て新作で、やりたいことの8割ができた。練度を上げる作業はこれからの仕事だ。

上下の違いではなく、前作のバンドの神髄、というか「らしさ」を覚えている人もいるだろう。新作の方が聴きやすいからこそ、前作の方が好きだというリスナーもいるだろう。

「そう言ってもらう方が、『新作良かったよ』って、サラツと言われるよりいい。みんながみんな、出たもの全てを良いってというのは、まだ数にも入ってないってことだから。やっぱりプロとして数に入れてもらうためには『アレはちょっと』って言われるようにもならないとね。それはそれで腹たつけど、そいつに『ウン』って言わせたいんですよ(笑)。ただ、ただね。これをライブで観てもらいたい。楽曲自体、素材自体は良いものでできてると思うし、ライブはいま、自分たちでも手応えがあるから」。

かつて同コーナーで大沢伸一がこう言った。「ライブは常にアップデートした最新型である」と。だんだん変わっていく。だんだん育ってるってのが分

かる。それを観せたい、聴かせたいのだと。

### 言ったモン勝ちの、免罪符発見。救いの色は、青だった。

「途中でね、このままやったら、前と同じ、寄せ集めになるぞ、と。『そうじゃないねん』『何が違うの?』で悩んで、アルバムとしてどうやったら成立するか考えたときに、見つかったのがもともとはアルバムに入れる予定のなかったこの曲で」。

それがタイトル曲にもなっている「スタートの青色」だった。サビではこう唄っている。

「邪魔はしないでね! この熱い瞬間を迷い吹き飛ばし沸き上がるステージで溢れ出す今と未来の種」

「邪魔はしないでね」と、これを言いますれば、後は何をやっても良いんじゃないか、と。それは、免罪符のよなもの? 「そうそうそうそう! 免罪符なんすよ。言ったモン勝ち(笑)。それを決めて、目の前が明るくなった。このアルバム、できたんちゃうの?」

もっとやりたい。もっと詰めたい。もっと、もっと。でもそれをやると「ポップじゃなくなる。それを全部出してしまったら、炎上する赤になる」。楽観的で、苦労性、求道的であり、ストイックな性格は、言葉の端々にこぼれてくる。最後に落とし前を付けてくれたのは、青という色だった。

### TOEPLITZがいて、くるりがいて、ガリバーゲットがいたら、面白くない?

棚からぼた餅のメジャーデビューを望む時代ではなく、メーカーの役割は、ぼっと出に莫大なバジェットをつぎ込んで早期回収を図ることではなく、基

礎体力を付けさせて、バンドだけでは見えない場所まで連れて行くことである。自己が強い、強くないかによってストレスの具合は変わってくる。販路やプレスサイズが大きくなるということは、つまり自分の身体が大きくなるようなものである。その動きの純さに、戸惑うことはあるだろう。くるりだつて、きつと同じ道をたどったはずだ。

「そうかもしれないね。だから、『あーしたい、こうしたい』っていう発言権がある、ということがまずありがたい」。

くるりやつじあやのが、技術を持っていないか、と、決して思わない。だが、「京都」という雰囲気というか、パブリックイメージをまとって、包括的にそれを武器にしたのは間違いないだ



### Gulliver Get (ガリバーゲット)

左から阪口裕一(Sax)、リーダーの山田洋一(B)、アヤヲ(Vo)、鶴田憲司(Dr)、山本隆(G)の5名からなる超テクニカルバンドであり、歌バン(ヴォーカル中心のバンド)。出身は関西圏に散らばるが、全員が京都在住であり、それぞれがその筋の一流ミュージシャンに師事し、「RAG」に出入りしていた者同士、7~8年がかりで結成。'06年3月、関西大手イベント主催の新人発掘オーディションでベストバンド賞獲得。同年7月、インディーズにて1stミニアルバム「はちみつの水槽」リリース。翌'07年6月メジャーデビュー  
<http://www.gulliverget.net>

ろう。「Gulliver Get」には、それが無い。極端な言い方をすれば、京都系でなくても良い、というかそうである必要がない。それでも彼らは、歌詞に「木屋町」と書き、彼らが「街」と言えば、それは河原町や烏丸であり、阪急前で痴話げんかをしているカップルの様子が曲になる。

悲喜こももがあった二作目ではあるが、「邪魔はしないで」と叫びながら、このバンドは走っていく。

自今の京都でのミュージックフェスは増えていくだろう。そこに名を連ねるのも、面白い。

「TOEPLITZ」がいて、つじあやのがいて、そしてガリバーゲットがいる。今シーズンの音フェスが、楽しみである。

### メジャー2ndアルバム「スタートの青色」発売中

3059円 GZCA-5155

去る2月4日に、フルアルバムをリリース。4thシングル「コイニオチタ」、扶桑社「マリカ」との運動企画3曲のアルバムバージョン、「コイニオチタ」ポサバージョンを含む全12曲。

3月27日：大阪クリスタ長堀にてフリーライブ(18:00~)

3月27日：西宮ガーデンズにてイベントライブ(13:00~/15:00~ 2ステージ)

Gulliver Get

Information